仙台教区報

発行所　カトリック仙台司教区
仙台市本町一丁目二番十二号
〒〇二二　二二二　七三七一
編集・発行人　笹氣直哉

生涯養成って？

最近、司牧評議会や各地の信徒連絡協議会などを通して、私たちひとりひとりの生涯にわたる信仰の育成について論議を呼んでいます。その中で、「生涯養成」という言葉が盛んに出てきました。そして、結構多くの信徒の方々から、「NICEを経験したのに、まだ教会は信徒を養成したがっているのか」といった意見がありました。

「養成」という言葉からそのような反応があったのです。「教える人」と「教えられる人」の図式が、まだ改められないでいるのですかということです。

健全な反応なのではないでしょうか。その背景にあるのは、信仰は成長していくものであり、同時に、互いの関わりのうちに、ともに成長するものだということがあるからです。

❀ ことばではなく

教会は長い間、一方通行の面があったと認めなければなりません。「教える人」「教えられる人」は、その典型的なところといっていいと思われます。

この図式をどのようにして転換させていけばいいのでしょうか。「養成」という語をやめて、「相互学習」と変えればいいのでしょうか。新しい言い方をすればよく分かっていいのでしょうか。

確かに、言葉遣いは大切ですから、よりよい、より分かりやすいほうがいいに決まっています。皆さまのお知恵拝借といったところです。しかし、お分かりのように、言葉が変われば、すぐに中身も変わってくるといったものでもありません。

❀ ひとりでは

信仰は、おそらく日常の出来事の中で培われ、養われていくものです。その出来事の意味を読み取っていくとき、信仰者として成長していくのではないでしょうか。

日常の出来事は千差万別でもありますし、共通しているところもたくさんあります。そして、誰でもがその出来事の真っただ中で生きています。つまり、誰もが日々信仰者として問われています。

その意味では、信仰の専門家はいません。皆が等しく信仰者として生きています。ただひとりでは、対応しきれない出来事に出会ったとき、どうすればいいのか分からなくなるのです。

❀ 互いに

信仰者として自立するためには、自らが判断し、決断し、実行できるようになりたいものです。そのプロセスで信仰の何たるかに気づいていきたいものです。

しかし、ひとりの力では無理ですし、むしろ、ひとりでやってはいけないのではないでしょうか。私たちは互いの関わりの中で気づき、成長していくのです。

そのためには、日常の出来事の共通しているところを見い出し、どのように対応しているかを話し合い、お互いがあてになるような関わりをもつことが大切なのではないでしょうか。

❀ イエズスに出会う

教会という場が、信仰者同士の出会いの場になっていくとき、教会はもっといきいきとした活気が呼び戻されると思います。

そして、いわゆる建物としての教会だけではなく、イエズスの名によって集っている場そのものが教会なのだということも、互いの関わりのうちに確信していけるのではないでしょうか。

ひとりひとりがイエズスに出会い、出会ったイエズスを互いに差し出し会って確認していければと思います。

第十六回 仙台教区 司祭大会

六月二十七日（月）から二十九日（水）まで、第十六回仙台教区司祭大会が仙台禎祥苑で開催された。佐藤司教をはじめ四十七名が参加した。

大会初日の午後、早速に神林師（中央協議会・次長）の講演があり、夕食後二名の信徒による「仙台教区として変わっていってほしいと思うこと、希望」「司祭に変わってほしいと思うこと」の二点について提案があった。

最初に、関谷秀雄氏（盛岡・四ッ家教会）（写真・左）が、「まず一人ひとりが『開かれた私たちづくり』から始めなければならない。信徒の自主的な信仰（福音宣教）共同体づくりをし、権利の主張や批評批判に終始することなく、受動的・消極性・甘えから脱皮し、管理社会から参画社会へ移行しなければならない。また、若い人ができる、若い人でなければならないことを任せ、老人のパワーをもっと活用し、タテ関係からヨコ関係へのつながりを広げなければならない。そのためにも、家庭集会の活用、教会同士の交流を深め、人から人へのロコミを大切にしていきたい。」また、司祭に対しては「方針を明確に示し、共に（対等に）話し合う中で自然にリーダーシップをとり、立場で話さず、人間として話してほしい。どこかに病人がいたら『行ってなぐさめてくれるか』と信徒に頼める司祭であってほしい。そして、すべての信徒が共同体の一員として、自分のなすべきことに気づくように関わっていただきたい。」

次に、新松義男氏（青森・本町教会）（写真・右下）は、「信徒は信仰によって救われたから、もう悩みや不安がなくなってしまった方々ではなくもしかしたら、世の人々の中の最も小さな人の一人なのかもしれません。ただ、神様のところに行くことしかできない教会だけが頼りの小さな人々なのかも知れません。（見た目にはそう見えなかったとしても）決して趣味や物好きから教会に来ていることではないのです。教会に来ている『ワケ』があるのです。家庭の中心にはお父さんがいなければなりません。

そして、教会の中心はどうしても神父様です。私の考えはもしかしたら間違っているかも知れません。でも私はそう思うのです。確かに、『教会は信徒の手で。信徒はもっと社会に目を向けて。』全くその通りです。

そこで、神父様方に今だからこそお願いがあります。

教会という組織全体に目を向け、その組織の働きのために一生懸命になられることは大切ですが、今、教会に来ている信徒、未信徒一人一人の心の中にある『ワケ』や思いを忘れないでほしいのです。ほとんどが幼児洗礼でない日本の信徒には、その人が自分の人生を賭けてカトリックにチェンジしなければならなかった、その人の『ワケ』があったのです。NICEを受けてから、働きは信徒に大きくかかっています。その信徒に『ともに喜べる』力があったら、一人ひとりは大きなエネルギーになると思います。」と述べ、翌日以降の貴重な提案となった。

アマゾンからの手紙

パウロ 首藤正義

愛なるイエズス

皆さんいかがお過ごしでしょうか？

六月二十五日、ブラジリアでのポルトガル語の研修を終えて、サンタレンに戻って来ました。ブラジリアから飛行機で四時間もかかりました。

今回の旅は、前回とは少し趣が異なっていました。前回は、期待と不安の入り交じった何とも言えない奇妙な旅でしたが、今回はゆったりした旅でした。たったの四ケ月でこんなにも心理状態が異なるとは夢にも思いませんでした。ブラジルでの生活に、少し慣れてきたことにも因るのでしょう。

ブラジリアでの四ケ月は、私にとって単に言葉の勉強だけではなく、人々との出会いという意味でも、大きな収穫がありました。特に、エスタジオ（体験学習）で出会ったエスパンサオの人々。ブラジリアでの最後の夜はエスパンサオを訪れ、一泊して来ました。十一時過ぎまでコーヒーを飲みながらカセットテープを聴き、近所の四家族との楽しい語らいの一時でした。いつ再び出会えるのか分かりませんが、出会いを心から喜んでくださる人々ができたことは、これからこの国で働こうとしている私にとって、大きな意味があります。もちろん機会があれば、是非また訪れたいと思っています。

サンタレンにて

サンタレンには六月二十五日の夜に着きました。前以て手紙で知らせていましたので、迎えがありました。これからの私の住まいは神学校です。神学校は大変大きな建物で、かつてフランシスコ会の修道院と神学校だったところです。敷地も大変広いです。そこに小神学生四人とベレンから休暇で帰っている大神学生、養成担当の神父が住んでいます。私の働くところはカラナザウという地域ですが司祭館がありませんので、神学校から通うことになります。（正式に働くのは来年からですが・・・・）

サンタレンは、ブラジリアとは色々な面で随分違います。気温のことをいうならば、ブラジリアでは夜、二枚の毛布が必要だったのに、サンタレンでは、シーツを一枚掛けるだけで十分です。食事に関しても異なります。ブラジリアでは肉が多かったけれども、こちらでは魚の料理が多いです。そして食事の内容も随分と異なります。ブラジリアのセンフィでの食事がどんなに豊かだったか、今、改めて知りました。こちらは貧しいです。そして、これがこちらの人々の普通の食事なのです。朝はパンとコーヒー。昼はご飯と魚とちょっとした野菜。夜は昼の残りのもの。従って夜になると、ご飯が少し固くなっています。みそ汁とかスープのようなものはありませんので、水を飲みながら食事をいただきます。でも楽しい食事です。語学の勉強が足りませんので、日中は机に向かって勉強しますが、食事のときも私にとっては言葉の勉強の時間です。

フォゲイラ・サン・ペドロ

六月二十九日はペトロ・パウロの祝日でした。六月二十四日の洗者ヨハネの祝日はブラジル全体が盛大に祝いますが、こちらではむしろ聖ペトロの祝いのほうが盛大です。土地柄に因るのでしょう。アマゾン河、タパジョス河で、漁師として生活している人が多いので、漁師であったペトロに近さを感じるのでしょうか。

私はボア・エスペランサのコムニタージ（共同体）で二十九日を祝いました。その祝い方は、二十八日二十九日の二日間、夕方になると『フォゲイラ・ド・サンペドロ』と言ってそれぞれの家の前で『焚火』をします。お盆の『迎え火』のような感じです。そして、二十九日には夕方、十字架とローソクを持った侍者の子供を先頭にたくさんの子供たち大人たちが参加し、模型の舟に安置されたペトロの像を担いで地区の通りを練り歩きます。これを称してプロフィッサオ（行列）といいます。プロフィッサオのための通りは前もって青年たちが奇麗に清掃し、たくさんのバンデイラ（旗）が飾られ、その下を行列して歩くのです。爆竹が通る先々でなる中、聖歌、ロザリオを唱えながら。そしてカペラ（聖堂）に着くと、『ビーバー、サン・ペドロ！』の三唱と共にミサが始まります。ミサの最中、

犬が入ってきたり、小さい子供が歩き回ったりしていますが、祭りの雰囲気は最高です。ミサが終わると、数字の書かれたカードをそれぞれ受け取りカペラの外に出ます。この日のためにジウベルト神父（彼は神学校と共に幾つかの共同体の責任を持っています）は四人分のプレゼント（聖書）を準備していました。賑やかな音楽のなる中で、数字が読み上げられ、その数字に該当した人がプレゼントを貰えるのです。また、簡単な食べ物、飲み物が信徒の人たちによって準備され、子供たち、そして青年たちによるクァドリーリァ（スクエア・ダンスのようなもの）が始まり、夜の十時頃まで続きました。

祭りで幕が開いた、サンタレンでの一週間でした。今日は、サンタレンで元気に過ごしていることをお知らせし、この辺で終わりにします。ちなみに、日本とサンタレンとの時差は十一時間です。

（七月十三日）

私がキリストを伝えるために

北仙台教会　芳賀ヒロ子

昨年十月に、仙台・聖ドミニコ学院で開催された、カトリック正義と平和協議会全国会議に出席した折りに、私の心にとまった言葉がありました。

パウロ六世が第二バチカン公会議によって正義と平和協議会を教皇庁にお作りになったとき「飢えた民は、いま、富める民に、苦しいうめきをあげて呼びかけています。教会はこの苦しみの叫びの前に、『ふるえながら』皆さんひとりひとりが、兄弟の訴えに、愛をもって応えるように求めています。」と、訴えました。

それを、日本カトリック正義と平和協議会の会長であり、名古屋教区・教区長相馬信夫司教は、次のように説明なさいました。

「『ふるえる』という事はすごいことだ。社会の問題、正義の問題、平和の問題というのは『ふるえない』と結局何もしない。ふるえない限り、安楽椅子から立ち上がれない。」とのことでした。

私はこの『ふるえる』部分が大変気に入りました。身のまわりの出来事に関わるとき、本当に困ったことだ、大変なことだと、自らを現場で体験させることにより、『ふるえる』ことができます。何もしないでは、ふるえられません。どんな小さな出来事でも、とにかく、遠くで見物しないで、問題に関わるため、現場を見に行ってください。そして勉強しているうちに『ふるえる』ことができてきます。

また、相馬司教は、一九七一年世界司教代表者会議の文書を引用され、「正義のための戦いと世界の改革への参加は、福音宣教の本質的な構成要素として、我々の前に立ちはだかっています。」また、「正義のための戦いは、福音宣教の不可決の部分である」という言葉を取り上げ、「愛と正義という、キリストのメッセージを世界の正義のための行動において、実現しているのでなければ、キリスト教が、現代人の信頼を勝ち得ることは、およそおぼつかない。」信頼されなければ、教会は宣教ができない。社会問題・平和問題に本気にならなければ、現代人は、教会を信用しませんよ。

カトリックは、社会的意識がうすく、宗教は個人的なものという伝統と、天国に行くためとか、自分の救霊だけを求める教会になっていたとしたら、平和のために働く人は幸いとか、平和に対して責任があるということを言っても、本当の意味で理解されない。」との悲痛な訴えでした。

（以下次号へ）

【これは、去る七月三日宮城県カトリック大会の際の講演内容です。全文を連載します】

聖書深読会のお知らせ

＊日時：九月十七日（土）十九時～二十一時
　　十八日（日）九時～十六時
＊場所：仙台・聖ドミニコ学院会議室
＊指導：カルメル会管区長・奥村一郎神父
＊会費：二、五〇〇円（昼食を含む）
　　宿泊の方　四〇〇〇円
＊持参品：聖書・筆記用具
＊申し込み：九月十五日（木）まで、宿泊の有無明記の上、ハガキまたは電話にて。
＊申し込み先：仙台市角五郎二丁目二の十四
　　聖ドミニコ修道院　シスター大沼
　　（昼間）022・222・6337
　　（夜間）022・225・1055